

豊臣期大坂図屏風

「豊臣期大坂図屏風」（オーストリア・エッゲンベルク城博物館蔵）について、センターでは特別プロジェクトと位置づけて研究を進めている。今年度は国際シンポジウムを2回開催した。また「豊臣期大坂図屏風」研究会を3回行った。

国際シンポジウムの開催

国際シンポジウム

「魅惑の探訪、豊臣期の大坂—エッゲンベルク城で再発見された大坂図屏風」

日時：平成20年8月21日（木）

会場：オーストリア

シュタイヤマルク州グラーツ市
クンストハウス・グラーツ

報告者：

フランチスカ・エームケ（ケルン大学教授）

「エッゲンベルク城の屏風の文化的意義」

高橋隆博（関西大学教授／センター長）

「日本文化と屏風」

狩野博幸（同志社大学教授）

「洛中洛外図屏風とエッゲンベルク城の大坂図屏風—16～17世紀の都市風俗図屏風としての歴史的意義」

北川 央（大阪城天守閣研究副主幹／センター研究員）

「16世紀末から17世紀初頭の大坂城」

黒田一充（関西大学教授／センター研究員）

「住吉大社の夏祭りの行列」

庄野真左子（前・ケルン東洋美術館学芸員）

「ファッションメーカーとしての東インド会社」

藪田 貫

（関西大学教授／センター総括プロジェクトリーダー）

「日本の屏風絵とヨーロッパライデン・グラーツ・エボラ・ローマ」

平成19年9月に関西大学で行なわれた国際シンポジウムを、屏風の原本が所蔵されているオーストリアのグラーツ市で開催した。グラーツ市にはエッゲ



ンベルク城を含む12の博物館施設があり、それらはシュタイヤマルク州立博物館ヨアネウムとして運営されている。会場となったクンストハウス・グラーツは、その中で一番新しい施設である。当日はペーター・パケシュ州立博物館ヨアネウム総監督の挨拶の後、発表と質疑応答が行なわれた。

コーディネーターとして司会進行も務めたエームケ氏は、エッゲンベルク城所蔵の屏風を紹介し、その風俗図としての特徴を述べられ、高橋センター長は日本の屏風の歴史とその使用方法を紹介した。狩野氏は、大坂図屏風が京都の町絵師の工房で作成されたもので、これまでに洛中洛外図以外でそうした作例はないことを指摘した。

北川氏は現在の大阪城と、織田・豊臣・徳川へと政権が移行する歴史を紹介され、黒田研究員は住吉祭の行列場面に登場する風体の人物たちが現在も日本各地の祭りで見られることを紹介した。庄野氏は、漆器や陶磁器などを材料に、東洋文化が西洋文化にどのように影響を与えたのかを紹介した。最後に藪田氏は、日本の屏風がヨーロッパにもたらされた経路と、屏風の下貼文書の資料的価値について指摘した。

シンポジウムに先だって、前日の20日(水)には、エッゲンベルク城において、大坂図屏風の原本調査と修復担当者からの聞き取り調査、検討会を行なった。現在は「日本の間」と呼ばれるようになった部

屋の壁面には、西洋人の手による中国風の人物画が描かれている。屏風はバラバラにされ、右端の第1扇と左端の第8扇の位置は逆だが、あとは反時計回りの順に、その人物画の間にはめこまれている。今回の調査では、絵の具の状態や、画面の傷み具合と修復の状態など、現地でなければ確認できない多くの知見を得た。



国際シンポジウム「新発見『豊臣期大坂図屏風』」

日時：平成20年11月22日（土）

会場：関西大学東京センター

参加者数 105名

講演・パネルディスカッション

フランチスカ・エームケ氏（ケルン大学教授）

バーバラ・カイザー氏

（エッゲンベルク城博物館主任学芸員）

狩野博幸氏（同志社大学教授）

イサベル・田中・ファン・ダーレン氏

（財団法人 日蘭学会）

高橋隆博（センター長）

総合司会

藪田 貫（総括プロジェクトリーダー）

「豊臣期大坂図屏風」の研究成果をより広く市民に還元するため、平成20年11月22日に東京で国際シンポジウムを開催した。

シンポジウムは、前半に各パネリストによる講演、後半にディスカッションという構成をとり、まずエームケ氏が、屏風が制作された経緯についての講演を行なった。エームケ氏は屏風に描かれる景観について解説し、その構図には豊臣秀吉を称える内容が暗示されているとした。

カイザー氏は、エッゲンベルク城の歴史をたどり

ながら、「豊臣期大坂図屏風」がグラーツの地に渡ることになった経緯について講演した。カイザー氏はエッゲンベルク家が屏風を購入した時期を1665年から1679年の間と推定し、購入ルートはアントワープの芸術商を通じてであることを述べた。

狩野氏は、美術史の観点から「豊臣期大坂図屏風」の制作年代について講演した。さまざまな「洛中洛外図屏風」との比較にもとづき、「豊臣期大坂図屏風」の制作年代を17世紀半ば頃であろうと推定した。

ダーレン氏は、江戸時代の日蘭交流史の立場から「豊臣期大坂図屏風」がヨーロッパへ渡ったルートについて講演した。寛永18年（1641）に長崎で出された輸出品目に関する禁令を紹介し、「豊臣期大坂図屏風」が輸出された時期を推定するキーポイントとなることを示唆した。

ディスカッションでは高橋センター長がコーディネーターとなり、「豊臣期大坂図屏風」の制作年代、さらに制作当初の本屏風の様相をめぐる議論がなされた。



屏風研究会の開催

第3回「豊臣期大坂図屏風」研究会

日時：平成20年7月4日（金）

会場：なにわ・大阪文化遺産学研究センター
文化遺産実習・展示室

報告者：大津留 厚氏

（神戸大学大学院人文学研究科教授）

「青野原俘虜収容所」

参加者数：20名

第3回の研究会では、これまでとはテーマを一変させ、近代におけるオーストリアと日本の交流史をとりあげた。大津留氏は、神戸又新日報という新聞

社の取材記事をもとに、兵庫県小野市と加西市にまたがる地域に存在した第一次大戦時の捕虜収容所「青野原俘虜収容所」を紹介され、そこに収容されていたオーストリア人と日本人との接点について報告していただいた。また当日は、近世オーストリア史を専門とする石井大輔氏（神戸大学大学院文化学研究科博士課程／同・学術推進研究員）に、「豊臣期大坂図屏風」の下貼りに使われた聖母子像の印刷物に関する私見を提示していただいた。

日本側の研究者が、屏風を所蔵するオーストリアに対する総合的理解を深めるうえで、大変有意義であった。



第4回「豊臣期大坂図屏風」研究会

日時：平成20年10月23日（木）

会場：大阪城天守閣

報告者：黒田 一充（センター研究員）

高橋 隆博（センター長）

藪田 貫

（総括プロジェクトリーダー）

辰巳 大輔氏

（株式会社 文化財保存）

参加者：19名

第4回目は、辰巳大輔氏を講師としてお招きし、「豊臣期大坂図屏風」の修復を主たるテーマとした研究会を開催した。あわせて、平成20年8月にオーストリアで行なわれた国際シンポジウムおよび屏風の調査に関する報告を行なった。

最初に、黒田研究員から、国際シンポジウムおよび屏風の現地調査に関する報告が行なわれた。次に、高橋センター長が、日本文化における屏風の変遷と役割について報告した。藪田総括プロジェクトリー

ダーからは、ポルトガルの都市エボラの図書館に所蔵される屏風の下貼文書に関する報告がなされた。そして最後に、辰巳大輔氏から「豊臣期大坂図屏風」の下貼文書に関する調査報告をしていただいた。

なお、当日は研究会にあたり、大阪城天守閣で開催されていた「徳川大坂城—西国支配の拠点—」を視察させていただき、宮本裕次氏（大阪城天守閣主任学芸員）より懇切な解説をしていただいた。



第5回「豊臣期大坂図屏風」研究会

日時：平成20年11月21日（金）

会場：東京国立博物館・たばこと塩の博物館

参加者：高橋 隆博（センター長）

フランチスカ・エームケ氏

（ケルン大学教授）

バーバラ・カイザー氏

（エッゲンベルグ城博物館主任学芸員）

第5回目は、11月22日（土）に開催される国際シンポジウム「新発見『豊臣期大坂図屏風』」のパネリストとしてフランチスカ・エームケ氏とバーバラ・カイザー氏が来日したことを受け、屏風を中心とする日本文化を理解するための視察を行なった。

視察した施設は東京国立博物館と、たばこと塩の博物館だった。特に後者では特別展「近世初期風俗画 躍動と快楽」が開催されており、「豊臣期大坂図屏風」に描かれた景観への理解を深める上で有意義であった。